

# 人間社会とコミュニケーション(Ⅱ)

——システム論的視点からの一試論——

村上 則 夫

## 目 次

- I 序 言——問題の提起——
- II システム・人間・自己組織性
  - 1. 生きているシステム
  - 2. 「人間」——自己組織システム——
- III 個人と社会
  - 1. 社会的存在としての人間
  - 2. システムとしての人間社会 (以上第27巻第1号)
- IV 関係とコミュニケーション
- V 人間・コミュニケーション・社会
  - 1. 人間相互間におけるコミュニケーション
  - 2. コミュニケーションと社会
- VI 結びに代えて——今日的な諸問題—— (以上本号)

## IV 関係とコミュニケーション

人間の精神や自我は他者との相互関係の中で形成され展開されることを

ミードは論じたが、既述したように、人間を人間たらしめるものは、自己そのものではなく他者とのかわりにおいてであり、自己たる個人と他の個人、即ち他者との相互関係を通して一つの社会的な共同ないし共存状態にはいり、そしてその時、人間は社会的存在となる。一般的に、通常の社会生活において、一人の人間は複数の他者との間で——消極的にせよ積極的にせよ——相互的な関係が存在し、その相互的な関係を通して社会的に存在しているのである。団結、共同、脅迫、逃亡、征服及び服従などその内容、動機及び状態（友好的状態ないしは敵対的状态）にも拘らず、人間は常に他者の存在を求め必要とし種々な関係を成立させている。仮に、意味という概念を導入すれば、人間の社会生活というのは複数の他者との関係の中での有意味的生活であると説明することができる。「個人の有意味的な行動は、いつでも他者の側の、それに対応する有意味的な行動を予想し、他者のもつ意味との対応関係のなかでの生活であることを意味する<sup>(1)</sup>」。

では、相互的な関係とは何か。つまり、これ迄の検討において確固たる規定や説明を加えずに、例えば自己たる個人と他者との相互関係、或いは人間と社会との相互関係といったように、「相互関係」という用語を意図的に幾度か用いてきた。一般的に、「関係」とはつながりであり、二つ以上の物事の間で、一方の行動ないし結果が他方に影響を与えるような状態にあることとして理解されている。簡潔的には、相互関係というのは文字どおり相互的、即ち単純にAからBへと流れる直線型の一方向的なことは異って、両方向的ないし双方向的なことを意味しており、かつ又そこに事柄の連続的な繰返しという状態が前提となっている。何れにしろ、相互的な関係という場合、最も注目すべきことは“inter”という点にあるのであり、このことはコミュニケーションの概念ないし役割等とも密接な関連をもっている。そこで、ここでは先ず、現実の複雑なコミュニケーション現象を捉える前に、相互的な関係という事柄について、主に社会学領域で議論されている内容等を参考にしつつ検討する作業から入ることにした。

表Ⅳ-1は、主に社会学、組織論及びシステム論等の研究領域で用いられている何らかの相互的な関係を表わす用語を列挙した表である。むろん、研究領域においては、厳密な内容規定が行なわれた上で用いられる場合もあるが、自明のことと考えるとさほど用語の内容に注意を払わずに用いられている場合もある。また、表の(a)~(e)の中で何れが最も相互的な関係の結合性が強いかわるい、或いは何れが最も連続性や一貫性があるのか、といった性質についても一概には確定が困難である。ここでは、(a)~(e)のすべての意味や性質に関する検討は避け、主に「相互行為」(interaction)に関する検討を試みることにしたい。周知のように、複数の行為者間の相互行為のシステムとして社会システムを説いたのはパーソンズであっ

表Ⅳ-1 相互的な関係の内容

(a) Interaction	； 相 互 行 為 (相互作用)
(b) Interdependence	； 相 互 依 存
(c) Interconnection	； 相 互 連 結 (相互接続)
(d) Interchange	； 相 互 交 換
(e) Interpenetration	； 相 互 浸 透

た。パーソンズらが、「社会体系においては、成員たちは単に物的環境に対して個人的に『行為する』(act)だけではない。彼らはお互いに対して『相互作用する』(interact)のであり、コミュニケーション<sup>(2)</sup>」のであり、「自我と他者との相互作用は社会体系のもっとも原初的な形式である<sup>(3)</sup>」と指摘している如く、システムとしての人間社会というのは、基本的には自己-他者の相互行為<sup>(4)</sup>に他ならず、この相互行為が複雑に交錯し多重・重層化してより大きなシステムとしての人間社会が形成されていく。その意味で、システムとしての人間社会とは二人以上の人間の相互行為のネッ

トワークともいえる。「諸要素間の相互作用というもの、これこそ、社会という極めて明白でありながら謎の多い生命体が強靱であり弾力がある所以、多彩であり統一がある所以なのである<sup>(5)</sup>」とは、ジンメルのもう一つの見解と見られるところである。

さて、社会的行為 (social action) というのは、「単数或いは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行動と関係を持ち、その過程がこれに左右されるような行為<sup>(6)</sup>」を指し、明らかに他者に志向された (other-oriented) 行為であるが、それが常に相互行為に発展するとは限らない。社会的行為から相互行為への発展には、一方の社会的行為が他方の社会的行為を触発するという作用と反作用の関係が必要不可欠である。もし、このような相互的な触発の関係がなければ、社会的行為は相互行為に発展しないのである<sup>(7)</sup>。つまり、相互行為というのは「複数の行為主体の間で、それぞれの社会的行為が互いに相手側の反応を呼びおこす刺激として作用しあい、交互に action ⇄ reaction と対応しながら展開するとき、その対応過程の総体<sup>(8)</sup>」をいう。ギデンズは、相互行為が社会学の研究領域で最も興味深い領域の一つであると説いた上で、次の二点をその理由として挙げている<sup>(9)</sup>。それは、まず第一にある程度定まった日々の行動様式とそれが巻き込む他者との相互行為によってもたらされる事柄の構造と形式の研究を通して、社会的存在である人間自身について、更に社会生活そのものについて数多くの事柄を学び得るからであり、第二に日常生活における相互行為の研究はより大きな社会システムや社会制度を照射していくからである、と説明している。この相互行為の最小規模のものは、二人の行為者の間でのそれであって、これをギリシャ語に由来する述語を用いてダイアド (dyad, Dyade, Paar) と呼び、ダイアドを構成する二人の行為者をそれぞれ自我 (ego, Ich) 及び他者 (alter, alterego, der Andere) と呼ぶ<sup>(10)</sup>。富永氏の説明によると次の如くである<sup>(11)</sup>。ダイアドにおいては自我と他者とは全く対等な行為者で、その関係は完全にシメトリカルである——即ち、支配・服従とか指導・被指導とかの関係を含まない——と

仮定される。従って、どちらを自我としどちらを他者とするかは全く互換的であるが、自我と呼ばれた方が行為主体として位置づけられ、他者と呼ばれた方がその自我にとっての行為客体と見做される。自我と他者とは直接的、即ちパーソナルに行為を交わしている。直接的とは他の個人を介在させないという意味であって、対面的（face-to-face）である場合と非対面的（例えば、電話で話したり手紙を交換する等）である場合の両方を含み得る。そして更に、氏によれば社会学的分析の単位は、自我と他者の二人の間の相互行為から成る単位社会体系（unit social system）たるダイアデック・モデル（dyadic model）と見做されるのが適当である<sup>(12)</sup>と述べておられる。むろん、このようなダイアドの設定は社会学的分析の最小単位であるだけでなく、コミュニケーション研究においても同様である。ロジャーズの見解によれば、ダイアドを設定することによって、コミュニケーション研究者は参画者の個人的なネットワークやクリック（派閥）の観察、更には全体のネットワーク分析へと発展させることが可能である<sup>(13)</sup>と説明している。

以上の考察からも明確に知れるように、相互行為というのは、明示的に他者の存在を基本前提とし、個々人の行為を通して互いに影響を及ぼし合う相互的ないし双方向的な特性を有した一つの動的な過程であると考えられる。過程（process）とは時間の流れに伴って生起する一連の連続的な活動の流れである。相互行為には一方向ないし単線的な影響や作用というものはないし<sup>(14)</sup>、相互の行為が瞬間的に消滅して連続性（繰り返し）ないし継続性が無いというものでもない。このような相互行為の過程は、その要素（二人の個人）の関係に着目すると、一つのシステムを成している。ニューカムらは、すべての実際上の目的からすれば、人間の相互作用の過程はコミュニケーションの過程であると指摘し<sup>(15)</sup>、そして又、ロジャーズらはコミュニケーションを「トータル・システムの諸部分の相互依存を促進する基本的過程<sup>(16)</sup>」と説いているように、明らかに、コミュニケーションは一つの過程である。そして、これ迄の検討内容と合わせて捉えるなら、

コミュニケーションとは、複数の人間（二人以上の）間の相互的、双方向的という特性を有した一種の動的な過程であると想定することができる。

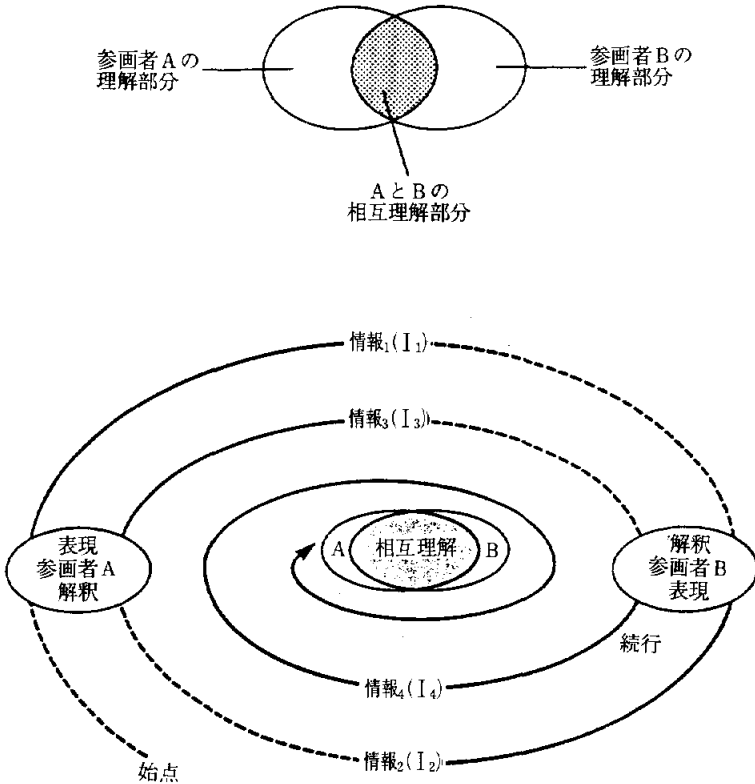
さて、コミュニケーションが一つの過程であることを最初に明らかにしたのは、情報理論の提唱者として知られているシャノン＝ウィーバー<sup>(17)</sup>である。よく知られているように、コミュニケーション・モデルを議論する時、必ず引き合いに出されるのがシャノン＝ウィーバー・モデルであり、このモデルはその過程及びその構成要素を最も抽象的に単純化したものとして応用の範囲が極めて広く、コミュニケーションを理解する上で偉大な業績であることに疑いの余地がない。しかし、このモデルは情報の流れが左から右へと流れる直線型の単一方向的で、フィードバックが考慮されておらず静態的なモデルとなっている。コミュニケーションにおけるフィードバック（feedback）とは発信者（送り手）が自分のメッセージに対する受信者（受け手）の反応を受け取ることであり、相互にメッセージの成否を「フィードバックを通して検証する<sup>(18)</sup>」、即ち発信者がフィードバックによって、当該メッセージが意図した通りに受け取られたか否かを判断することが可能となるのである。このようなフィードバックのメカニズムの存在によって、メッセージの相互性ないし循環性がみられることになる。他方、発信者においてメッセージが作られる過程、或いは受信者においてメッセージが解釈される過程を考慮に入れていない点においても、現実的であるとは言い難い。現実には生起する場であるシステムとしての人間社会において、人間相互間で行なわれているコミュニケーションは極めて多様で非線形的であるとする認識が必要であり、単純に理解不可能な複雑さを秘めた動的な過程であると思われる。発信者と受信者との区別が固定しておらず、発信者と受信者との役割や立場は相互に入れ替わり、すべての当事者が情報の発信者であると同時に、受信者でなければコミュニケーションは成立しない。コミュニケーション過程は相互的、双方向的であり、繰り返し生起する螺旋状のものであると考えるべきであろう。

コミュニケーションを部分的ではなく全体的・総合的な過程として捉える立場を強調するロジャーズは、情報が単なる物的なもので個人の心という文脈を持たないとする仮定に基づいた結果、次のような偏向が過去のコミュニケーション論や研究に見られたとして、その諸点を簡明に挙げている<sup>(19)</sup>。第一に、コミュニケーションを時間の経過に伴った循環的双方向の過程としてでなく、原型的な単一方向の行為、それも通常は上から下への縦型か又は左から右への横型として見ること。第二に、コミュニケーションを行なう個人間の関係よりも、発信源のバイアスの方を重視して提示すること。第三に、コミュニケーションの目的事物が単純で孤立した物理的事物として捉え、その存在する文脈を無視して焦点を当てること。第四に、コミュニケーションの主な機能を相互理解や意見の一致及び集合的行動としてではなく、単一方向の説得行為として考えること。第五に、コミュニケーションの社会的効果やネットワーク内の個人間の関係よりも、むしろ分離した単独個人へのコミュニケーションの心理的效果に重点をおくこと。そして第六として、人間のコミュニケーションのシステムは基本的にサイバネティクスの、つまり適応制御的であるのに反して、ヒューマン・コミュニケーションにおいて相互的でない、単一方向の機械的な因果関係を仮定すること、であるという。そして、彼は従来の研究で提示されていた単一方向的で機械的な因果関係を想定したモデルに代わるものとして、彼独自のコミュニケーションの収束モデルを提唱したのである。

このコミュニケーションの収束モデルでは、次のような螺旋的な軌跡を描く過程として記述される<sup>(20)</sup>。図Ⅳ-1から理解できるように、先ずコミュニケーションの参画者Aは、自己の思考の表現のために創造した情報I<sub>1</sub>を参画者Bが知覚して解釈し、そのあと参画者Bは参画者Aと共有する情報I<sub>2</sub>を創造して反応する。以下、彼らは情報の創造と応答過程とを繰り返して、最終的に十分な相互理解に到達した時の満足感を自覚するまで継続していくことになるのである。満足感を自覚するまでというのは、相互理解は決して絶対的な意味で到達し得ない、即ち当事者双方の完全な相互

理解は殆ど期待できないからであり、多くの場合、コミュニケーションの目的達成においては完璧な相互理解を必要としない。ロジャーズの主張するところによれば、コミュニケーションの概念はコミュニケーション過程における参画者間の情報の交換による共有を意味すべきであるとした上で、「コミュニケーションとは、相互理解のために参画者がたがいに情報をつくりわちあう過程である<sup>(21)</sup>」と定義している。

図IV-1 コミュニケーションの収束モデル



(出所) Rogers, E.M., *Communication Technology : The New Media in Society*, New York : The Free Press, 1986 (安田訳 『コミュニケーションの科学』、共立出版、1992、213頁)。



つまり、コミュニケーションというのは、そのラテン語の語源に「共有する」という意味があるように、単純に情報が伝達されるのではなく、当事者双方が共同して新しい情報を創造し、当事者双方が情報を共有する過程であると捉えることができ、もっと簡潔に表現すれば、相互理解の収束過程とは新たな情報を創造し情報を共有する過程と捉えることができる。そして更に、我々は新たな情報を創造し<sup>(22)</sup>情報を共有する過程は、そこに意味を見出し、意味の理解と共有及び価値の共有を目指す過程でもあると考えている。このことから、積極的な情報の創造者としての高度な能力、意味の創造者としての優れた能力をもつ人間の側面を認識することが重要であるといつてよからう。

なお、相互浸透 (interpenetration) という用語は、他の相互的な関係に比して、その関係性が極めて強い印象を与える用語であるが、この概念はパーソンズ<sup>(23)</sup>やルーマンの著作において見ることができる。ルーマンは、相互浸透という概念は関与するそれぞれのシステムの構築に対して、そのシステムの環境における他のシステムによってもたらされる特別な種類の貢献を言い表すために用いられていると指摘した上で、「相互浸透にとって肝要なのは、システムと環境との関係一般ではなく、あるシステムと他のシステムとが交互に他方のシステムの環境の一部となっている、そうしたシステムとシステムの間に成り立つシステム間関係なのである<sup>(24)</sup>」と説明している。そして、相互浸透という概念は人間と社会システムとの関係についての一層立ち入った分析のための鍵を提供していると説いており、システム間関係の把握において、特に用いられる概念と考えることができよう。

注 (1) 下田直春『増補改訂 社会学的思考の基礎 —— 社会学の基礎理論批判的展望 ——』、新泉社、1981、288頁。

(2) Parsons, T. & Bales, R.F., *Family Socialization and Interaction Process*, London: Routledge & Kegan Paul, 1956 (橋爪他訳『家族』[下]、黎明書房、1981、

115頁).

- (3) Parsons, T. & Shils, E. A. (eds.), *Toward a General Theory of Action*, *op.cit.* (同訳書、167頁).
- (4) 「行為」について、ミードは著書の中で「行為とは生命過程が必要とするある種の刺激を選択することで、生命過程を維持する衝動である。このようにして、生物体は、みずからの環境をつくりだす」と述べている。Cf. Mead, G. H., *Mind, Self, and Society*, *op.cit.*.
- (5) Simmel, G., *Grundfragen der Soziologie*, *op.cit.* (同訳書、22頁)。ジンメルは、「人間と人間の間には、もっと小さな、一つ一つとしては問題にもならぬような関係形式や相互作用様式が無数にあって、それらが公的とも言える大きな社会形式の間へ忍び込んで、それで初めて世間でいう社会が生れるのである」(同訳書、21頁)と、洞察力に満ちた指摘を行なっている。
- (6) Weber, M., *Soziologische Grundbegriffe*, In *Wirtschaft und Gesellschaft*, Verlag von J. C. B. Mohr, Tübingen, 1992 (清水訳『社会学の根本概念』、岩波書店、1972、8頁)。
- (7) 青井和夫『社会学原理』、サイエンス社、1987、85頁。なお、多くの研究者が「相互行為」と「社会的行為」とを同義とはせず、両概念の区別について論じている。
- (8) 森博『社会学的分析』、前掲書、181頁。森氏は、社会的行為を単核的・円的概念であるのに対して、相互行為の方は複核的・楕円概念であると述べている。
- (9) Giddens, A., *Sociology*, 2nd ed., Cambridge: Polity Press, 1993 (松尾他訳『社会学 [改訂新版]』、而立書房、1993、97頁)。
- (10) 富永健一『社会学原理』、前掲書、110頁。
- (11) 同上書、111頁。自我にとって他者は社会的状況の構成要素を成すが、富永氏は自我が状況と関連する際の係わり方には、(a)目的として、(b)手段として、(c)条件として、(d)障害として、の四つの場合があると指摘されている。
- (12) これらの点については、富永健一「社会体系分析の行為論的基礎」青井編『理論社会学』(社会学講座1)、東京大学出版会、1974、122-129頁を参照されたい。
- (13) Rogers, E. M., *Communication Technology*, *op.cit.* (同訳書、214頁)。
- (14) ゴッフマンは、焦点が定まっていない相互作用 (unfocused interaction) と焦点の定まった相互作用 (focused interaction) とに区分し、前者の相互作用に関して、彼は「その場にいる別の人が自分の視野に入る時に、その人を一

瞬ちらりと見て、その人に関する情報を集める場合に起こるコミュニケーションである」と説明しているが、このような内容であれば、「相互作用」とする表現を用いるのは疑問である。なお、ゴッフマンの見解に関しては次の著作を参照されたい。Goffman E., *Behavior in Public Places ; Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York : The Free Press, 1963.

- (15) Newcomb, T.M., Turner, R.H., & Converse, P.E., *Social Psychology : The Study of Human Interaction*, New York : Holt, Rinehart and Winston, 1965 (古畑訳『社会心理学』、岩波書店、1973、213頁).
- (16) Rogers, E.M., & Agarwala-Rogers, R., *Communication in Organizations*, New York : The Free Press, 1976. p.57.
- (17) Shannon, C.E., & Weaver, W., *The Mathematical Theory of Communication*, Urbana : University of Illinois Press, 1949.
- (18) Newcomb, T.M., Turner, R.H., & Converse, P.E., *op.cit.* (同訳書、248頁).
- (19) Rogers, E.M., *op.cit.* (同訳書、211頁). 彼は、我々の「コミュニケーション分析とコミュニケーションの収束モデルの概念は、総合的な全体的相互作用重視の態度を反映しているものである」(同訳書、220頁)とも述べている。
- (20) *Ibid.*, (同訳書、212-214頁).
- (21) *Ibid.*, (同訳書、211頁).
- (22) 本稿では、情報の創造に関する詳細な検討を避けるが、情報創造とコミュニケーションに関しては以下の二つの拙稿を参照されたい。拙稿「システムと情報創造」『長崎県立国際経済大学論集』、第23巻、第2号、長崎県立国際経済大学学術研究会、1989、27-63頁及び拙稿「情報創造とコミュニケーション」『実践経営』、第24・25合併号、実践経営学会、1993、181-185頁。
- (23) Cf. Parsons, T., Shils, E.A., et al. (eds.), *Theories of Society*, New York : The Free Press, 1961.
- (24) Luhmann, N., *Soziale Systeme, a.a.O.* (同訳書、336頁).

## V 人間・コミュニケーション・社会

### 1. 人間相互間におけるコミュニケーション

コミュニケーションというのは個人にとっても、かつ又人間社会全体に

とつてもその果たす役割や重要性は計り知れない。逆に、もしコミュニケーションの無用論や無意味性を論証しようと意図しても、恐らくその試みは全く失敗に帰するであろう。およそ、生きているシステムである人間はコミュニケーションを通して、開放系であり動態的なシステムである人間社会の存在を知り、世界の存在とあり方を知る。人間は「世界のなかで生活し、世界を有するものである。人間は、世界にあずけられている存在であり、しかも、人間は、社会を世界として<sup>(1)</sup>」捉えることが可能なのである。多少の誇張を許して頂ければ、人間が社会的に存在しシステムとしての人間社会の発展等を考えるなら、ロイシュが指摘しているように「コミュニケーションから身を引くことは、一瞬たりともできない<sup>(2)</sup>」ということであり、個体としての個人を社会的存在としての人間として成立させる最大の役割を演じ貢献しているのがコミュニケーションであるといつてよい。

コミュニケーションという用語そのものは、人間同士では日常広く繁茂に用いられ、また実際に行なわれているが、広い意味でのコミュニケーションは動物においても——人間と動物とは同一レベルでの議論は不可能だが——行なわれていることは既に知られている。昆虫のフェロモンと呼ばれる化学物質の匂い、カエルや鳥の鳴き声、魚の腹の婚姻色やミツバチの蜜源を伝えるダンスなど嗅覚、視覚、聴覚、触角等を刺激する本能的なパターンによって、情報を伝達し個体間での固有の相互作用を行なっている<sup>(3)</sup>。しかも、先天性が後天性に優先するが、比較的下等な動物でさえ学習から恩恵を得ること（例えば、鳥の鳴きぶりの質が改善されたり、鳴き声の種類が多くなる等）ができる点等も明らかになっている。また、哺乳類のような高等動物になると、あらゆる場合においてコミュニケーションが重大な意味を持つ。つまり、接触性・非接触性の如何を問わず、親子、雌雄、発育過程の同胞、同集団内の仲間同士、優位者と劣位者、敵対者同士、見知らぬ者同士といった様々な相互関係において各種のコミュニケーションが種社会を維持しているのである<sup>(4)</sup>。動物社会学者の今西氏の所説によれば、種社会を構成している個体はそれぞれの個体が人間から見れば集まっ

ていないようでも、形態的・機能的、或いは体制的・行動的に、同じようにつくられている同種の個体の間には何らかの形でコミュニケーションが成立し、またそれらがコミュニケーションの可能な範囲で生活しているからこそ、必要に応じて雌雄が相会し、繁殖をはかり、種を維持してゆくことも保証されているという<sup>(5)</sup>。

既に一部を紹介したように、従来コミュニケーション研究は各研究分野において積極的に試みられ、種々な議論を積み重ねてきてはいるが、その概念規定は非常に多義的で確固たる定義は存在しておらず、統一的で決定的な見解は見当たらない。まさしく、ボールディングの次の指摘は深い示唆に富んでいる。つまり、「コミュニケーションは複雑な概念である。実際、それは十分明確に定義されていない外延をもった概念の一つの群れである。しかし、この複雑さがコミュニケーションという言葉の重要性を増大させている<sup>(6)</sup>」のである。そして又、定義や概念規定の多様さが物語っているように、コミュニケーションに対するアプローチも多角的ないし多元的であり、コミュニケーション現象に対する分析方向や方法及びコミュニケーション・モデル (communication model<sup>(7)</sup>) も多様である。例えば、研究者の中には、形態別に個体内コミュニケーション (intra-personal communication) からマス・コミュニケーション (mass communication) までを類型化<sup>(8)</sup>した上で考察する方法も試みられ有効と考えられるが、あく迄もそれは考察の一つの方向に止まっている。岡部氏は、人間コミュニケーションに対するアプローチを、その視点から、(a)記号作用又は意味過程としてこれを捉える見方と、(b)人間関係又は社会関係としてのコミュニケーションを考えるという、二つのカテゴリーに大別されている<sup>(9)</sup>。つまり、前者は記号作用もしくは意味過程としてのコミュニケーション研究であり、後者はコミュニケーションが人間関係の基盤となり、そこに一定の社会関係をつくり出すという点に注目したコミュニケーションの分析、即ち人間関係、もしくは社会関係としてのコミュニケーション研究である。吉田氏によれば、コミュニケーション論はいま二重の岐路に立たされてい

ると指摘し、既存科学（既存の人文・社会諸科学）の応用テーマとして出発したコミュニケーション研究は、先ずコミュニケーション科学として独立し、次いでそれはその内的展開の必然的帰結として、情報科学へと発展的解消を遂げることになる、と指摘しておられる<sup>(10)</sup>。

先に、コミュニケーションとは複数の人間相互間の相互的、双方向的という特性を有した一種の動態的な過程であると捉えたが、システムとしての人間社会を構成している人間相互間に、シンボルを通して、そしてシンボルの中でも最も代表的かつ重要な「言葉」を通してのコミュニケーションが成立することは、人間以外のシステムと基本的に異なる点である。もちろん、厳密な意味で、言語というものが人間にのみ固有であるか否かの議論は暫らく措くとしても、ピカートの考えに従えば「言葉は人間の存在そのものに属している。言葉は人間の存在の一部であって、それと融合している<sup>(11)</sup>」のであり、人間が行なうコミュニケーションというものが言語において極めてその特徴をよく現わすことは議論の余地を残していない。モリスは記号をサイン (sign) と呼び、更にこのサインをシグナル (signal) とシンボル (symbol) とに区別したが<sup>(12)</sup>、シンボル (=シンボル情報) はその代表的な言語の他に、表情、身振り、音声及び視線等をも含むもので、生得的、本能的に用いられるものではなく、人間がつくり出し用いるものである。従って、人間はシンボルを創造する者であり、シンボルを学習し、その豊富なシンボルを操作する者ともいえる。人間は動物と異なって、個々人が非常に豊富な主観的内面の世界、即ち意識の世界を発達させているが、「シンボルは客観化され共有された意味を担っていることによって、個々人のこの主観的内面の世界を相互に伝達しあい理解可能にする役目を果たすことができる<sup>(13)</sup>」のである。このシンボルの有する独自な性質ないし機能から、人間が行なうコミュニケーションは動物のそれと比類し得ないほど極めて高度で、かつ複雑なものとなっており、その方法においても際限なく発展し拡大する可能性を有している。

構造主義の創始者ソシュールは、言語 (langue) と言 (parole) とに区

別し、言語は「一つの社会システム」であり、観念を表現する記号のシステムであるのに対して、言は個人の行為であると主張した<sup>(14)</sup>。ホールは、言語は文化を表わすのに最もよく用いられるシステムであり、言語無くしてコミュニケーションは有り得ず、それ故文化もコミュニケーションも言語に依存せざるを得ない<sup>(15)</sup>、と述べているが、言語によってこそ、システムとしてのかなり精密で明確な内容のメッセージを構成（形成）できることは、既に我々の知識の一部となっている。このような点で、人間相互間におけるコミュニケーションにおいて、最も人間的であり重要と考えられる具体的な方法は言語によるもの、即ち言語的コミュニケーション（verbal communication）である。レヴィ=ストロースは著書『構造人類学』（*Anthropologie structurale*）において、「言語は人類の発展のきわめて初期の段階に現われた。科学的な研究をくだてるためには書かれた資料をもたねばならぬという事情を考慮しても、文字言語がきわめて古くから存在し、数学的分析を可能にするに十分な資料の系列を提供していることは認められよう<sup>(16)</sup>」と指摘しているが、言語は人類を相互に関係づける大きな役割をもち、人間社会の成立の基礎をなすものである。そして更に、人間は新たな言語をつくり獲得することによって新しい世界を開示するのである。コミュニケーション研究における言語への興味と関心は尽きない。しかし、言語的コミュニケーションだけが唯一の主要な方法ではない。近年のコミュニケーション研究においては、言語に関する研究と同程度かそれ以上に取り沙汰され検討されているのが非言語に関して、即ち合理的な言語観が看過したり排除してきた<sup>(17)</sup>非言語的コミュニケーション（nonverbal communication）に関してである。ホール<sup>(18)</sup>が沈黙のコミュニケーションとして表わしている非言語的コミュニケーションでは、例えば身振り、姿勢、手振り、ジェスチャー、顔の表情、視線の方向（配り方）、対人距離及び接触行為など言語以外の殆どがその方法として用いられる。人間は、このような非言語等を日常的に数多く用いる実に表現豊かな存在である。この点について、山岸氏は次のように指摘されている。「人間は、言葉を

話す以前にさえ、その身体的態度・行動・所作・リズムカルな運動や発声・あらゆる種類の器物や芸術作品や社会制度などの創造において、表現的なものであり、人間は、その存在それ自体からして表現的なのだ<sup>(19)</sup>」と。

「本来、経験世界は言語と非言語とが相互に張り合い交錯するところに開かれてくると考えられるし、言語と非言語との間には、終結することのない不断の循環があるといわねばならない<sup>(20)</sup>」。典型的には、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションとは同時的に進行して、非言語が言語で言い表わすべきことを省略したり誇張したり、或いは又補足したり強化して、全体的により有効で適切なコミュニケーションの実現を目指していく。但し、非言語的コミュニケーションは言語的コミュニケーションに比べて受信者側の主観的解釈や判断の自由度が高いために、時として、発信者に対する不信感、偏見、意味の混乱、不正確及び誤解といった、所謂「障害」の発生が伴いがちであるが、反面、我々は実際のコミュニケーションでは、往々にして非言語の方が真実を伝えることを経験的に知っている。つまり、言語によって伝えられる内容よりも、言葉にならないものの中に非常に多くの感情や意味、或いは真意や目的があり、その意味では言葉のもつ役割を遥かに超えた役割を演じていると考えられる。アラングレインは、「一定の社会状況のもとでは、言語は受け手と同様に送り手自身からもリアリティを隠蔽するかも知れない<sup>(21)</sup>」と指摘しているが、誰もが言語的コミュニケーションによって、意図的に真意を隠蔽したり歪めたり、或いは虚飾したために、結果的に、例えば長らく続いた友人との友好的な関係を崩壊させたりすることを熟知しているといつてよいだろう<sup>(22)</sup>。言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションとを比較して、後者の方が比重が重く、両者が矛盾した場合、受信者は非言語的コミュニケーションの方を信じるとする研究もあり<sup>(23)</sup>、このことから、人間が言語を極力放棄して非言語を貫くことは不可能であろうが、非言語の諸相を探りその役割を明らかにする努力等は、複雑なコミュニケーション現象を解明する上でも大変有益であるといえよう。



- 注(1) 山岸健『増補 社会的世界の探求——社会学の視野——』、慶應通信、1985、28頁。
- (2) Ruesch, J. M. D. & Bateson, G., *Communication: The Social Matrix of Psychiatry*, New York: Norton, 1968, 1951 (佐藤他訳『コミュニケーション——精神医学の社会的マトリックス——』、思索社、1985、5頁)。
- (3) 林進「コミュニケーションと人間社会」林進編『コミュニケーション論』、有斐閣、1988、12-13頁。
- (4) 香原志勢「高等動物のコミュニケーション——人間にいたる情報進化——」石井他編集『情報システムとしての人間』、中山書店、1984、16頁。
- (5) 今西錦司『動物の社会』、思索社、1990、329頁。
- (6) Boulding, K. E., *The World as a Total System*, California: Sage Publications, 1985, p.133.
- (7) 各種のコミュニケーション・モデルを理解するには、次の文献を参照されたい。McQuail, D., & Windahl, S., *Communication Models: For the Study of Mass Communications*, Essex, Longman Group, 1981.
- (8) Cf. Miller, G. R., "The Current Status of Theory and Research in Interpersonal Communication", *Human Communication Research*, 4, winter 1978, pp.164-178.
- (9) 岡部慶三「コミュニケーション論の概観」内川他編『講座現代の社会とコミュニケーション 第1巻 基礎理論』、東京大学出版会、1973、15-29頁を参照。
- (10) 吉田民人「情報科学の構想——エヴォルーション主義のウィーナー的自然観——」吉田・加藤・竹内『社会的コミュニケーション』、培風館、1967、3-8頁及び吉田民人『自己組織性の情報科学——エヴォルーション主義のウィーナー的自然観——』、新曜社、1990、23-27頁。
- (11) Picard, M., *Die Welt des Schweigens*, Erlenbach-Zürich, Eugen Rentsch Verlag, 1948 (佐野訳『沈黙の世界』、みすず書房、1964、56頁)。
- (12) Morris, C. H., *Sign, Language and Behavior*, New York: George Braziller, 1946.
- (13) 富永健一「世代間コミュニケーション」竹内編『言語とコミュニケーション』、東京大学出版会、1988、177頁。富永氏は、同書において、コミュニケーションを「社会システムにおいて、文化の形成を可能にしている基盤としての、思惟する個々人の主観的内面世界をつなぐ相互理解を可能にする意味伝達の

過程である」(177頁)と規定されている。

- (14) Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale* (publié par Bally, C. et A. Sechehayé), 1949 (小林訳『一般言語学講義』、岩波書店、1972)。
- (15) Hall, E. T., *Beyond Culture*, New York: Doubleday, 1976 (岩田・谷訳『文化を超えて』、TBSブリタニカ、1979、72頁)。
- (16) Lévi-Strauss, C., *Anthropologie structurale*, Paris: Librairie Plon, 1958 (荒川他訳『構造人類学』、みすず書房、1972、64頁)。
- (17) 梶原景昭「言語表現の全体性——民族文化における言語の実践——」石井他編集『情報システムとしての人間』、中山書店、1984、31頁。
- (18) ホールが非言語の重要性を説いている主要な文献として下記のものがある。  
Hall, E. T., *The Silent Language*, Garden City, New York: Doubleday & Company, 1959 (国弘他訳『沈黙のことば』、南雲堂、1966)。; Hall, E. T., *The Hidden Dimension*, New York: Doubleday & Company, 1966。
- (19) 山岸健『社会学の文脈と位相』、慶應通信、1982、399頁。
- (20) 古東哲明「非言語と言語」『経験 言語 認識』(新・岩波講座哲学2)、岩波書店、1985、190頁。
- (21) Aranguren, J. L., *Human Communication*, George Weidenfeld & Nicolson, 1967 (藤竹監訳『人間コミュニケーション』、鹿島出版会、1971、138頁)。
- (22) 下記の文献は、言語・非言語による欺瞞的なコミュニケーションに関する研究として実に興味深い。大坊郁夫「記号化と解説——欺瞞のコミュニケーションを中心として——」大坊・安藤・池田編『社会心理学パースペクティブ2——人と人とを結ぶとき』、誠信書房、1990、55-64頁。
- (23) 荻野綱男「コミュニケーションの記号と意味作用」林進編『コミュニケーション論』、有斐閣、1988、219頁。

## 2. コミュニケーションと社会

ここで、改めて強調する迄もなく、コミュニケーションと社会との関係においても、開放系であり動的なシステムである人間社会の形成及び発展とコミュニケーションとが分かち難く結ばれた緊密な関係にあることは議論の余地を残していないし、それらの相互的な関係を幾ら強調しても強調し過ぎることはないだろう。人間社会の形成及び発展の基本的要因の一つとして、簡潔には、先ず人間の成長ないし進歩が不可避である。レヴィ＝

ストロースの言葉を借用すれば、人間の成長ないし進歩には、基本的に「人間が協働する必要がある。そして、この協働の過程で、人間は次第に各自の持寄る寄与を一体化する<sup>(1)</sup>」のであり、この人間同士の協働の過程で多様なコミュニケーションが深い意味を発揮する。斯くて、人間が自己の生命を維持するために自然に働きかける時、それが人間の協働関係として遂行される以上、そこには一定のコミュニケーションが前提とされる。それだけに、文明形成のメルクマールとしては、対自然的な道具史観より、むしろ対社会的（協働の場）なコミュニケーション史観の方が遥かに注目される<sup>(2)</sup>、とする捉え方も成り立つのである。

ショーダベックらは、社会の存在そのものがコミュニケーションに依存していると指摘しているが<sup>(3)</sup>、システムとしての人間社会はコミュニケーションのうちにおいて存在しているとも表現できる。ルーマン流に言えば、コミュニケーションが無ければ社会システムは決して形成され得ないのである。ルーマンは三つの不確実さ、即ち(a)自我は他我が何を考えているか、その理解についての不確実さ、(b)受け手へのコミュニケーションの到達に係わる不確実さ、(c)コミュニケーションの成果の不確実さという存在を指摘し、「コミュニケーション過程には不確実さが内在しているのであるが、そうした不確実さが克服され確実さへと変換される方途は、同時に社会システムの構築のあり様を規制している<sup>(4)</sup>」とも述べている。そして又、加藤氏はコミュニケーションという概念と社会という概念は、ある意味では同義に近いとして双方の関係の緊密さを強調し、そして又、これ迄のところ、一定のコミュニケーション・システムがそれに対応する社会システムを決定するという側面に力点をかけたが、逆に特定の社会システムが特定のコミュニケーション・システムを成立させるという面も当然ながらしばしば起こる<sup>(5)</sup>と説いておられる。

先の考察で明らかにしたように、人間はシンボルを創造する者であり、シンボルを学習し、その豊富なシンボルを操作する者であるが、シンボルの有する独自の性質ないし機能が人間の存在を他の存在から明確に区別し

浮き立たせ、更に又、人間社会の形成及び発展との関連でコミュニケーションを捉えた場合にも、このシンボルの果たす役割は極めて大きいのである。シンボルを用いるからこそ、人間が行なうコミュニケーションが時間を超越し特定の空間を超えてその範囲を飛躍的に拡大し、更に「世界をより統一的なコミュニケーション・システムへと結びつける<sup>(6)</sup>」可能性を開くことができる。特に、シンボルの代表的な言語の人間社会への貢献は特筆に値するものといえる。「言語について考えてみるならば、人間の独自性が、明瞭に理解される。シンボルを操作しつつ、相互に、あるいは、他者に対して、なんらかの情報を伝達する、というこの事実こそ、人間の日常生活を著しく特色あるものとしている<sup>(7)</sup>」。ラッセルによれば、人類の歴史を振り返ってみると、人類の相互連結の主要な第一歩は言語の発達によってもたらされたと述べている。つまり、言語は人間同士の間で、それ迄より一層直接的な情報や知識の伝達・交換を可能とし、単純なコミュニティや村落のような人間の集団化を推し進めたのである<sup>(8)</sup>。そして又、言語的コミュニケーションは時代から時代へないし世代から世代へと情報を継承し蓄積することを可能とする。要するに、言語というのは過去と未来との橋渡しをするものであり、言語学者・ヤーコブソンの考えに従えば、「生命の第一義的発現である遺伝コードと、他方、人間の普遍的な天賦であり、それとともに遺伝から文明への重大な跳躍である言語とは、祖先から子孫へ受け継がれる情報<sup>(9)</sup>」なのである。

このような理解から、コミュニケーションは、現在そして将来におけるシステムとしての人間社会において、その果たす役割や重要性は絶えず深化し拡大する方向にあり、その及ぼす影響（力）も一層高まることは論を待たない。ラズローは、一連の社会システムには分化、量的成長、上位システムの形成及び複雑性に向かう傾向が認められ、その発展の速度は、コミュニケーションの割合と領域の増大に伴って加速していくことを明示している<sup>(10)</sup>。現在に至る迄、人類が試みてきている種々な情報技術の開発及び利用等は、コミュニケーションを可能とする世界の構築を意図した人間

の絶え間ない努力の成果であるといえる。このような「人類の創造物が人間の運命を好転できるか、人間に変容を迫るか、破壊に導くかいまはわからない。ともかくも人間の業績の根本にあるのは、コミュニケーション能力であり、これこそ協同の基盤なのである<sup>(11)</sup>」といえよう。

- 注 (1) Lévi-Strauss, C., *Race et Histoire*, Suivi de *L'oeuvre de Claude Lévi-Strauss* par Jean Pouillon, 1961 (荒川訳『人種と歴史』、みすず書房、1970、72頁)。
- (2) 高瀬浄『エコノミーとソシオロジー』、前掲書、5-6頁。氏によれば、ギリシャ神話に出てくる商業の神(ヘルメス)はコミュニケーションの神であり、連結の神であったし、ローマ神話に出てくるマーキュリーについても同じことがいえるという。
- (3) Schoderbek, C.G., Schoderbek, P.P., & Kefalas, A.G., *Management Systems: Conceptual Considerations*, rev. ed., Dallas, Texas: Business Publications, 1980, p.158.
- (4) Luhmann, N., *Soziale Systeme, a. a. O.* (同訳書、251頁)。
- (5) 加藤秀俊『コミュニケーション体系と社会体系』吉田・加藤・竹内『社会的コミュニケーション』、培風館、1967、317頁。
- (6) Boulding, K.E., *The World as a Total System*, *op. cit.*, p.140.
- (7) 山岸健『増補 社会的世界の探求』、前掲書、95頁。
- (8) Russell, P., *The Global Brain: Speculations on the Evolutionary Leap to Planetary Consciousness*, New York: Tracher, 1983, pp.87-88.
- (9) Jakobson, R., *Essais de linguistique générale*, 1973 (田村他訳『一般言語学』、みすず書房、1973、257頁)。
- (10) Laszlo, E., *The Systems View of the World*, *op. cit.*, p.66.
- (11) Ruesch, J.M.D. & Bateson, G., *op. cit.* (同訳書、40頁)。

## VI 結びに代えて——今日的な諸問題——

時として、人間は誰とも会話せず孤独で過ごしたいと思う。しかし、それはこれ迄に築き上げてきた複数の他者との友好的な関係、更に又人間社

会との様々な関係を完全に断ち切って孤立状態に我が身を置きたいと願っているのではない。人間が社会的に放置されて、社会の誰にも全く見向きもされないほど残酷な刑罰は考えられないのであり、それに比べれば最も残酷な肉体の責め苦でさえも救いである<sup>(4)</sup>、とするジェームズの指摘は卓見といえよう。

これ迄の考察で明確に理解し得たのは、コミュニケーションをどのように定義づけ規定しようとも、明らかに、コミュニケーションが人間の存在と行為、人間社会の形成及び発展を可能ならしめる基礎的要件である、ということに他ならない。従って、複雑なコミュニケーション現象の全体像を捉えようとする研究は、取りも直さず、この世に生まれて直ちに複数の他者との相互関係を生きる社会的存在としての人間、自己組織システムとしての人間そのものを問い、開放系であり動的なシステムとしての人間社会の過去・現在・未来の姿やあり様を考え論ずることであると明言し得よう。

最後に、ここでは殆ど考察の対象として取り上げなかったが、今後とも一層議論すべきコミュニケーションに係わる幾つかの問題、特に今日的と考えられる諸問題を三点に要約し、簡潔に示すことによって本稿を締め括ることにしたい。

第一に、非言語的コミュニケーションに係わる問題である。コミュニケーションの方法として考えた場合、極めて特殊な状況を想定しない限り——例えば、相互に言語が全く理解不可能であるとか、言語の使用を禁止される等——、言語的コミュニケーションが主流の座に置かれることは否定されない。しかしながら、先に多少触れたように言語と非言語とは絶えず絡み合っており、相互補完的ないし相互依存的な関係にある。しかも、通常の社会生活における人間相互間のコミュニケーションにおいて、我々は経験的に、好むと好まざるとに拘らず、非言語の方が言語以上に真意を伝え、偽らざる情報を伝達することに大きな役割を演じていることを知っている。だが、その解釈や判断の仕方は、実に主観的であり明解な論理的根拠

を示し得ないのが常である。従って、取分け今日のとは言い得ないが、複雑なコミュニケーション現象の全体像を捉える意図から考えても、言語に関する徹底的な研究は無論のこと、ある意味で不可思議な非言語の世界に一層光をあて、非言語的コミュニケーションの果たす役割や効果等に関する説明が求められる。

第二に、コミュニケーションの新たな形態の生成及びその範囲の急速な拡大に伴う問題である。周知のように、最近の情報技術の飛躍的な発展によって、多種多彩で高度な新しいメディアが登場し、従来の時間的・空間的な諸制約を受けずに人間相互間のコミュニケーションが可能となり、システムとしての人間社会全体にも多大な影響等を及ぼしている。人間の場合、自己自身の直接的経験の世界（或いは直接的接触の世界）と間接的経験の世界（或いは間接的接触の世界）との二重の世界に生きているともいわれるが、高度な新しいメディアの登場と効果的な利用によって後者の世界を益々開きつつあるといえる。しかし反面、意図しない問題が隠されていることも認めないわけにはいかない。それは、ガンパートの見解を借用すれば、たとえグローバル・コミュニケーションが得られたとしても、真に身近なコミュニケーション——個人とその家族、隣人、友人達との間の相互的な関係——が失われるとしたら、これは非常に深刻な問題である<sup>(2)</sup>ということに尽きよう。元シカゴ大学精神医学部教授であったキューブラー・ロスは次のように述べている。「進歩する科学技術の速度と矛盾することなく、個人的な人間対人間の接触により多くの時間がかけられるようになれば、そのときはじめて、われわれは偉大なる社会を口にすることができよう<sup>(3)</sup>」と。

第三に、もはや我が国では自明のことと言える、所謂「国際化」に伴う異文化間コミュニケーション(cross-cultural communication)の問題<sup>(4)</sup>である。情報技術の飛躍的な発展によって、コミュニケーションの範囲が益々拡大しつつあり、グローバルな規模でのコミュニケーションが深く広がりつつある。そこで、当然ながら、異なる文化背景をもつ人間と人間との間

で行なわれるコミュニケーションでは、異文化との接触において生起する様々な問題を慎重に配慮する必要があり、多くの場面で容易に理解困難な課題を提起せずにはおかないだろう。文化と言語との関係のみならず、文化と非言語との関係等も重要な研究対象となり得ることと考える。

- 注(1) James, W., *Psychology: Briefer Course*, 1892 (今田訳『心理学(上)』、岩波書店、1992、249頁)。
- (2) Gumpert, G., *Talking Tombstones and Other Tales of the Media Age*, Oxford: Oxford University Press, 1987, p.189.
- (3) Kübler-Ross, E., *On Death and Dying*, New York: Macmillan, 1969 (川口訳『死ぬ瞬間』、読売新聞社、1971、35頁)。
- (4) 近年、異文化間コミュニケーションに関して論じた文献も多く見受けられるが、例えば、鍋倉健悦『人間行動としてのコミュニケーション』、思索社、1987、或いは辻村明・Kincaid, D.L. 編『コミュニケーション理論の東西比較』、日本評論社、1990等も参照されたい。

(完 結)